

監査報告書

特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会

代表 大村 虔一 様

私、監事は、特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会の
2012年4月1日から2013年3月31日までの業務執行及び財産の
状況につき、会計帳簿及び基礎資料の閲覧並びに会計収支計算書、
会計貸借対照表、会計財産目録について調査しました。また、理事、
事務局へのヒアリングを実施して監査を行った結果、当協会の事業
運営は適正に行われたと認めます。

平成25年6月10日

監事

奥村 玄



福島 智子



2012年度 日本冒険遊び場づくり協会

平成25年6月9日

【会計監査検討経過報告】

■財務方法の変更に伴うトラブル

2012年度の財務諸表に関しては、内容は正確なものとは判断するが、11年度までのそれと型式が異なっているために、単純に比較することができず、12年度の状況がどうだったのか、把握が難しかった。また、財務諸表の注記もあり、かなり詳細な説明を受けたにもかかわらず、どの項目にどの数字が含まれているのか分からず、1回の監査では完了できなかった。その後、事務局に、コメントと共に事業別の2012年の予算と実績について再整理を依頼したが、かなりの作業量に上ったと推察される。

監査の結果、部門間の整合がうまく取れていないことが明らかになった。本来は管理部門に入っているべき項目が事業04や事業07に入っていた。

このような不整合が生じた原因は、期の途中で会計が機能しなくなってしまったにもかかわらず、理事会が迅速に対応できなかったことから、その状況を期末まで引っ張ってしまったことにある。

この財務諸表の変更は、認定NPO取得に向けた準備の一環であり、法人を継続的に運営していくために最も要になる会計に関して、理事会はもっと慎重に対処する必要がある。

会計の方法が改善されるだけでなく、会計から見えてくる活動のあり方が問われるということである。そのような視点で監査を実施した。

■管理部門の安心運営のために

管理部門は、最小限の人数で運営されている。会費で管理部門を安定的に支えるという目標は徐々に実現しつつあるが、スタッフに大きな負担がかかっているということを忘れないでください。常に外部に対して窓口になっている事務局スタッフは、協会の社会的評価についても日常的にビビッドに感じるポジションにいる。

また、会計について述べるならば、リース契約に関して理事会の適切なサポートがなかったために、不本意な契約を招いている。管理部門が安心して活動できるように、理事会は運営と経営の全般にわたってきめ細かい判断を提供する義務がある。会計について協会全体の危機管理を進めるためにも、さらに管理部門への配慮を深めていくことが求められよう。

■個別の事業における収支について

販売に関しては、売上げ22万円に対して売上げ原価15万円と送料1万円がかかり、収益は6万円となっている。さらに、数字には表れにくいですが、販売のための発送作業その他手間がかなりかかっている。たとえ収支が赤字だったとしても、収益事業を行っていれば法人税7万円は必ずかかる。今期は、過去5年分の法人税延滞料金として38万円の予定外の支出があった。続けていくべきなのかをもう一度考える必要がある。

税金については、消費税もかかる。今期は受託事業収入が1,000万円を越えたので、それに対して5%の消費税がかかる。これは、震災関連でも対象になる。消費税で50万円以上、きちんと計上していく必要がある。

■2013年度の収支計画への提言

収支計画について、全体を通じた検討にもっと時間をかける必要があると感じる。管理部門の費用は必ずかかるものであり、減額は協会の機能低下にダイレクトにつながる。会費と一般収入でまかなう安定的な経営を強化するためにも、今期は積極的に実施しなかった会員の拡大に力を入れていくのはもちろんのこと、他にも確実に収入の見込まれるシステムを総力をあげて構築する必要に迫られている。

また、各事業部門から持ち上がってきた収支計画を合算して全体計画とするのではなく、全体を俯瞰し、これまでの実績とこれからの展望を照らし合わせながら吟味する過程を充実する必要もあると考えられる。

全国集会は、全国の会員の交流と意欲を高めるための重要な機会であると、深く認識した上で敢えて申し上げるが、補助金などの収入の見通しが十分に立っていない状況で100万円単位の支出が想定されていることを、全国の会員に理解していただき、さらに会員の拡大や社会へのアピールの方法を積極的に考える場としていただきたい。

【事業監査検討経過報告】

■ 組織の展望

2013年4月現在の日本冒険遊び場づくり協会を確認できている全国のプレーパーク活動団体の数は300に上る。それに伴い協会の仕事は規模も責任も大きくなる。昨年度、協会は身の丈に合う仕事量を設定し、役割分担も明確にすることによってやるべきことを着実に遂行するような仕組みを築きつつある。協会の組織の特徴は、理事会が全ての活動を把握し改善を図ることで、相互に知恵を出しながら常に総力戦を目指していることである。その力を今後も十分に発揮することが期待されている。一方で、情報誌の会員参加や、全国各地の小集まりなど、会員全体の力を有効に活用することで協会全体の意思疎通を図る不断の努力がされている。それは、縦割りの弊害を越え、総合的な取組みとするための挑戦ということもできる。

しかし、十分に機能させるためには課題もある。それぞれの活動の経過や成果には、かけがえのないノウハウが含まれている。各担当者がその情報を適切なタイミングで発信することである。事務局はそれを流通させることが任務となる。各担当者が発信しないことには編集も流通もできない。

本年度の始めに理事会は仕事のスリム化と「言ったらやること！」という目標を掲げた。各理事はそれに向けて最大限の努力を重ねているし、会員もその努力に敬意を表しているものと考えられるが、会員の期待に応えるためにも、情報発信は協会の生命線とも言える活動であり、今後も継続的に有効な方法を編み出していくことが求められる。

繰り返しになるが、規模が大きくなるにもかかわらず縦割りの弊害を克服しようという組織の挑戦を意識した活動が協会全体に求められる。

■震災復興支援

被災した地域の子どもたちが、心に大きな傷を持ちながら懸命に生き抜こうとしている現在、遊びのもたらす重要な役割に期待がますます大きくなっている。この1年間に、子どもにとって遊びがいかに大きな影響を果たすのか、そして協会の活動に対する社会の理解は非常に深まったということができよう。

協会の継続的な支援、スタッフが移住をして献身的な活動を続けてきた結果、少しずつ地域主体の活動へと移行する手だてが講じられ、被災地におけるプレーパーク活動は、徐々にだが軌道に乗りつつある。昨年度の監査報告書では、多くの市民から寄付を仰いでいる活動の責務として何らかの見通しを立てながら活動を進める必要性を述べた。今回は、蓄積されたかけがえのない経験をノウハウとして編集し発信する段階にあることを申し述べたい。

被災地は極めて特殊な状況であることは言うを待たない。しかし、プレーパークの普及というミッションに対して普遍的な視点をもたらししていることも事実である。遊びの重要性を多くの市民に体験的に理解してもらう方法、場の運営に必要な空間や道具、運営に欠かせないプレーリーダー、運営全体を支える地域組織など、1年半の活動を通じて得られた視点や原則を今後の全国の展開に活かしていきたい。そのためには、きちんとノウハウとして記録していくことが重要である。

■全国一斉開催のスケールメリットをどのように活かすのか

年々、参加団体が増え、今回は200団体近くに上った。それにより多くの仲間が意を強くし、今後の活動への意欲を高めたことと思われる。それは大きな成果である。しかし、一斉開催のもう1つの目的は、全国で多くの活動が行われ、プレーパークが各地に浸透しつつある、そのことを社会にアピールする絶好のチャンスであり、より多くのメディアに取り上げられることである。それは、残念ながら増えていない。メディアは初物に飛びつくという見方もあろう。しかし、定期的に開催される社会現象として取材しないわけにはいかないイベントもある。スポンサーは、それを見て社会的意義と支援効果を鑑みながら協力の手を差し伸べる。パブリックビューや、記者クラブへの投げ込み、各地の自治体へのDM、記録映像のCD化と配布など、せっかくメディアが取り上げてくれるのだから、それを効果的に活用したいし、メディアが「乗り遅れたくない！」と思えるような情報力を備える戦略が求められる。

■小集まりのねらいと情報の流通

身近な地域で協力し合いながら、連携や課題解決の機会を充実させようという趣旨で「小集まり支援制度」が設けられた。残念ながら活用は年間数件にとどまる。そもそもニーズを読み切れていなかったのか、事業の目的がうまく伝わらなかったのか、事業のあること自体がPRしきれていないのか、原因を探る必要がある。

思いついたらやってみるという、プレーパークならではのフットワークの良さが現れている事業だと考えられるが、その効果をきちんと検証していくことが重要である。そのた

めには、各地で小集まりを実施したみなさん、集まってみて良かった点をどんどんレポートとしてまとめ発信してください。「レポートとして」ということが重要だと考える。なぜなら、事務局で流通させやすく、ストックしやすいからである。メールだけだと、事務局は膨大なメールを読み、かつ、編集しなくてはならない。レポートのためのフォーマットを用意することも考えられるが、あまり型に縛られない自由な議論が小集まりの真骨頂と考えるならば、自由な形式でかまわないので、地域運営委員による簡単なレポートがあると、全国のメンバーのストックにできる。そして、事業としても実りある成果を期待できよう。

■ ついに発刊されたリーフレット

協会と、協会の各メンバーに蓄積されている情報をリーフレットで刊行するという企画は数年前から提案があり期待されていた。そして遂に今年度、発刊にこぎつけた。現場や体験に重き置き、文字にするととらえきれない微妙な感情やコミュニケーションにあふれていることはよく理解できる。しかし、プレーパークの魅力を社会に広げてゆきたいというミッションを掲げている協会から、ノウハウの発信として継続性を期待させる第1号が発刊されたことは大きな一歩であり、今後も続刊が望まれる。漫画によるプレーパークのPRリーフレットの発刊も重なり、プレーパーク叢書の今後が楽しみである。

以上、監査作業の中で救い上げることで、今後の議論に役立てていただければ、という気持ちでいくつか気づいたことをご報告いたしました。